

COVID-19 に関しての笑いの共有

—女性友人同士によるオンライン電話での多人数会話を事例に—

児島麦穂(大阪大学大学院生)

1. はじめに

本研究は、オンラインビデオ通話(Zoom)上で行われる女性多人数会話をデータとし、そこで観察された COVID-19 に関する笑いを含む相互行為の談話分析を行う。笑いの性質として早川 (2000a)は笑いを、A 仲間作りの笑い、B バランスを取るための笑い、C 覆い隠すための笑いに分けている。その中でA 仲間作りの笑いを、A-1 話題共有期待の笑い、A-2 共有表明の笑い、A-3 共通認識に基づく笑いに下位分類し、A-1 と A-2 の笑いが繰り返されることにより共通理解が構築され A-3 の笑いが発生すると分析した。このようなA 仲間作りの笑いは、親しい間柄の雑談において多く発生する(早川, 2000b) ことが明らかにされているように、本研究で扱う女性友人同士による私的な会話においても多く観察され、このような笑いのプロセスにより COVID-19 とその影響に関する共通理解が参与者間で構築、共有されていた。本研究ではこのプロセスを分析することにより、1) COVID-19 とそれを巡る社会情勢に関する参与者らのどのような視点や考えが、表出及び共有されるかを明らかにする。またその中で、2) どのような笑いの性質が観察され、参与者らがどのように笑いを共有するのかを実際の会話データの分析により解明する。

2. 理論的枠組み

分析枠組みとして、Bamberg (2004)による相互行為のナラティブ分析と、Glenn (2003)による笑いの社会相互行為的アプローチを援用する。笑いの社会相互行為的アプローチ(Glenn, 2003)において、笑いは本能的に発生するものではなく、何らかの目的のために行われるものとして扱われ、前後の相互行為、参与者らの関係性、相互行為の形式などの文脈とともに相互行為の流れの一部として分析される。このような分析方法により、会話参与者らが笑いを含む相互行為を通して何をやりとりし、何をどのように達成しているのかを明らかにする。

3. 調査方法

本研究のデータは女性多人数会話の継続・縦断調査(2018 年開始)の一環として、2020 年8 月後半に収録された現在 20 代の女性 3 名の Zoom での会話である。会話参与者らが高校時代からの友人であること、彼女らがそれぞれの家から飲食をしつつ会話していること、Zoom での会話は今回が初めてではないことから、本研究ではこのデータを比較的日常的に近い自然談話として扱う。本調査では、データ収録時に研究者のカメラとマイクをオフにし、トピックなどの提供も行わず、会話の進行を全て参与者らに委ねることで、友人同士の私的な相互行為における偶発的な笑いを観察することができた。以下に会話参与者らの基礎情報を示す。

会話参与者	年齢	職業	性別	関係	備考	データの長さ
YI	25	会社勤務	女性	高校時代の同級生。同じ部に所属し、活動していた。	グアム在住。	25 分 10 秒
RA					大阪在住。	
MT						

[会話参与者の基礎情報]

4. データと分析

本稿では上記のデータから 3 つの場面を抜粋する。データ 1 とデータ 2 を通して、本来であれば笑いの対象にはならないはずの COVID-19 に関する深刻な状況が参与者間で笑いの対象として許容され、COVID-19 に対する意識が共有されていく様

子を分析する。

4.1 COVID-19 を巡る深刻な状況に関する笑いの許容

本節では COVID-19 に関して参加者らが実際にどのような状況にいるか、またどのような経験をしたかについて会話を通して共有する場面を分析する。いずれの場面でも笑いが発生している点に注目する。

[データ 1]

- | | |
|-----------------------------------------|------------------------------------|
| 1. RA: え, グラム結構[感染者多いん? | 11. ((頷く)) |
| 2. MT: [な: | 12. YI: グラムの人口少ないから: |
| 3. (.7) | 13. RA: [うん |
| 4. YI: 今やばい: (.6) [1 日に: | 14. YI: [なんか1 日に: ろ, 6 千人くらい[でたレベル |
| 5. RA: [やばいんや | 15. RA: [huhuhu [やば |
| 6. YI: なんかね, せ, 今週: 先週か. 1 日に 100 人超えて: | 16. MT: [hihihi |
| 7. (.5) | 17. YI: ¥やばいやん? ¥huhuhu |
| 8. YI: [で, それをなんか[東京の人口と換算すると, | 18. (1.0) |
| 9. RA: [ほ: | 19. RA: ¥出過ぎやって¥ |
| 10. MT: [うん | |

データ 1 ではグラムに住んでいる YI に対し, RA が現地の感染者数を訪ね(1 行目), それに YI が答える場面である。8 行目から, YI がグラムの感染者数を東京に換算すると「1 日に 6 千人くらいでたレベル」(14 行目)と説明すると, 聞き手の RA と MT が笑いで反応する(15, 16 行目)。その聞き手の反応を見て, YI も笑いを見せている(17 行目)。ここでの笑いには, YI が述べたグラムの感染者数が東京の人口に換算してみると「やば」(15 行目)いレベルであることを認識したことに伴う笑いであると考えられる。通常, COVID-19 の感染者が多いことは深刻な状況を示しており, そのような地域に居住している YI は感染の危険性が高い状況にいることを示している。それにも関わらず, 本場面では笑いが発生しており, COVID-19 を巡る深刻な状況を参加者らが笑いの対象にしたと言える。

[データ 2]

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 79. RA: えでもそうそう. 会社とかでも出はじめてるもん. | 112. YI: [hahaha |
| 80. もう(.6) [あの: 正式に | 113. MT: [huhuhu [¥(やめたれよ)¥ |
| 81. MT: [¥出たん?¥ | 114. RA: [hahaha |
| 82. (.7) | 115. YI: hahahaha |
| 83. RA: ¥あ, 出た出た. なんか絶対おったけど: ¥ | 116. RA: ¥かわいいそう¥ |
| 84. [なんか正式には発表されてないやん. | 117. MT: ¥最低¥ |
| 85. YI: [¥まじか: ¥ | 118. YI: ¥かわいいそう¥ |
| (中略) | 119. RA: ((笑顔で数回頷く)) |
| 108. RA: そう. で, ほんまかわからんけど | 120. YI: ¥公開処刑やん¥ |
| 109. で, 同期からも[写真送られて来て | 121. RA: ((笑顔で頷く)) |
| 110. ((両手で四角を作る)) | 122. huhu¥かわいいそうやろめっちゃ: ¥ |
| 111. このひ, こいつらしいよみたいな: ¥感じで: ¥ | |

上の場面では RA の会社内で感染者が出たことが話題となる。社内では感染者の個人情報隠されていたにも関わらず, RA は感染した者の情報を写真付きで同期から受け取ったと笑いながら語る(108-111 行目)。これは早川 (2000a) でいうところの A-1 の笑い(自分の楽しいと思うことに付加され, 談話の促進を促す笑い)である。つまり RA は, 自身が社内で経験したことをおかしみを生む出来事だと捉え, それを語ることで会話の場で聞き手の参加者と笑いを共有しようとしていると言える。これに MT と YI は笑いで反応(112, 113 行目)しており, これは A-2 の共有表明の笑いであると言える。つまり, RA が相手と共有しようとした出来事のおかしみは, 聞き手である MT と YI によって受け入れられ, 笑いの共有が成功したと言える。その後, 感染者の個人情報を流通させた RA の同期を批判し, 感染者本人を「かわいいそう」(116, 118 行目)と述べているものの, いずれも笑いを伴っている。ここで笑いの対象となっているのは, RA の社内で感染者の個人情報が出回ったという状況である。このような状況は 120 行目で YI が「公開処刑」と言っているように, 感染者の印象に悪影響を与え, 当人の身を危険に晒しかねない行為であり, 本来なら笑うべきではない深刻な出来事であると言える。しかしながら, 参加者間では情報が出回ったという状況を笑いの対象として捉えており, 「やめたれよ」(113 行目)とストーリー

一世界の登場人物(情報を出回らせた人々)へ反論はしているものの、これも笑いを伴っており、笑いを伴わなければ反論も感想も述べない状態が続く。「かわいいそう」や「やめたれよ」はその状況を批判的に見ているとも取れるが、それはRAを批難する内容ではなく、ストーリー世界の出来事に対するの異論や感想である。それを笑いを伴わなければ言えないというのは、最初にRAがこれを笑いを伴いながら「笑い話」として語ったため、それに対する同調と許容の笑いだと言える。また、RAは当初感染者が出たという話題については笑いを伴わず発話している(79-80行目)ものの、聞き手のMTが笑いで反応を返した(81行目)ことにより、この一連の出来事を笑い話として語ってもよいというサインを受け取ったと言え、RAがこれ以降、これを笑い話として語りやすくなったと言える。このように参加者は、COVID-19に関連する深刻な内容の不謹慎な笑いに同調し、許容する者同士であることをデータ1,2を通して互いに確認し合ったと言える。

4.2 COVID-19に関する笑い意識の共有

本節ではデータ1,2で発生した笑いにより参加者らが構築した共通認識に基づいて、さらに笑いが発生する。このような笑いを含む相互行為を通して、参加者らが語るCOVID-19に対する意識に注目して分析をまとめる。

[データ3]

- | | |
|----------------------------------------|----------------------------------------------|
| 146. RA:でもなんかいち,1人目になりたくないよね | 162. MT:[¥もう1人出たし:(.4)なんかさ:1人目はさ |
| 147. なんか[何人か出たんやたらもういいけど: | 163. ¥結構バタバタするやんか |
| 148. YI: [:(頷く)) | 164. (.6) |
| 149. MT:[う:ん | 165. RA:あ,その処理とか色々手続きとかやろ? |
| 150. [:(笑顔で頷く)) | 166. MT:[社会的にもバタバタしてなんか大阪全員 |
| 151. (.4) | 167. YI:[うんうんうん,確かに確かに |
| 152. RA:[() | 168. [:(数回頷く)) |
| 153. MT:[¥もうだって[1人出てるから大丈夫やん¥(.4) | 169. MT:とりあえず出勤停止して:来んなってなって: |
| 154. [:(人差し指を出す)) | 170. みたいな |
| 155. [¥もう大丈夫¥ | 171. YI:うんうん |
| 156. RA:[¥まあそれは()¥[hahahaha | 172. MT:なったけどなんかもうわかるやん. |
| 157. YI: [hahahaha[haha | 173. 1人目そんな感じ[なったら: |
| 158. MT: [:(体を前に | 174. [:(人差し指で机を数回叩く)) |
| 乗り出して笑う)) | 175. ¥次なくてもそういう対応になるやん¥ |
| 159. RA:¥それは間違いない¥ | 176. (.9) |
| 160. (.9) | 177. YI:[確かに |
| 161. RA:[¥間違いない¥ | 178. [:(頷く)) |

データ3では感染するとしても、1人目にはなりたくないと言ったRAが述べ、それにMTが「もうだって1人出てるから大丈夫やん」(153行目)と笑いながら、RAの発言の矛盾(データ2においてRAの会社で既に感染者がでたことが語られている)を指摘する場面である。この発言にRAとYIは笑いで反応し(156,157行目)、さらにRAが「それは間違いない」(159,161行目)と笑いながら同意を示す。このMTによる153行目の発言は、会社で既にCOVID-19に感染した者がいるため、RA自身が感染したとしても問題はないとするものである。COVID-19という危険性が高いと言われていたウイルスに感染したとしても問題ないと述べることは、本来であればRAに対して配慮のない発言であると言える。しかしながら、この場面においてMTはそのような発言を笑いながら行っており、これを受けたRAも笑いで反応している。ここでは先にRA自身が感染することそのものについては言及せずに1人目になることを問題視しており、MTとYIはそれに同調したと言えるだろう。

データ3での笑いは、データ1,2における共有表明の笑い(A-2の笑い(早川,2000a))を通して、参加者らがCOVID-19を巡る状況に関しては笑っても良いという共通認識を構築していたために発生した笑い(A-3の笑い)であると言える。つまり、データ1,2において参加者らはCOVID-19やそれに付随する危険性を笑いの対象にしてきており、これにより、COVID-19に感染すること自体は自分たちの健康状態や生活に影響を与えるほどリスクの高いものではないという認識を共有してきたと言える。だからこそ、共通認識に基づく笑いの共有を期待してMTは、RAが感染しても社内で1人目でないなら問題ないという発言を行い、またRAもそれを笑いで受け入れたと分析できる。

さらに162行目以降MTは1人目の感染者でなければ問題ない理由として、感染者がでた場合、本人だけでなく感染の疑いがある他の社員を出勤停止にするなどの対応が必要となるため、1人目の感染者は大変であるものの2人目以降であれば同様の対応を行えばいいためだと説明する(162-163,166,169-170,172-175行目)。これに対しRAとYIも同意を示す発

言や相槌を随時行っており(165, 167-168, 171, 177-178行目), MTが述べた意見は参与者間の共通認識であると分析できる。これにより, 参与者らが COVID-19 を巡る状況を笑いの対象とし, その危険性を軽く捉える一方で, それによる周囲への影響は避けたいという認識を相互行為により共有していることが明らかになった。

5. 考察

5.1 参与者らが表出した COVID-19 に対しての認識

本稿で分析を行ったデータから, グアムの感染者数の多さ, RA の社内で感染者の個人情報が出回ったことを参与者らが笑いの対象としていることが観察された。またその後の場面では, 感染1人目になることに比べれば感染することそのものは問題ないと笑いながら述べていた。つまり本研究のデータでは, COVID-19 の感染拡大や感染のリスクは笑いの対象となり得ることが示された。

このような相互行為から, 参与者らが COVID-19 に感染すること自体は問題ないと考え, その危険性を軽視する正常性バイアス(normalcy bias) (McLuckie, 1973)¹を持っていることが観察された。その一方でデータ3で見られたように, 会社内で1人目の感染者になり会社に迷惑をかけるような事態は避けたいと述べていることから, 参与者らは COVID-19 感染した際の周囲への影響や, 周囲からの視線を懸念していることが明らかになった。

5.2 COVID-19 に関しての笑いのプロセス

本データから, 参与者らが経験した COVID-19 に関する出来事を順番に語る中で, それぞれの語りに笑いが伴っていることが確認された。これらは全て, 早川(2000a)でいうところの参与者間の仲間意識を高める「仲間作りの笑い」であった。それを構築するプロセスを通して, 参与者らは COVID-19 の影響を少なくとも笑いの対象として捉える程度には軽く捉えているという認識を, 互いが保持していることを確認し合い, またその認識を強化したと言える。このように仲間内での会話を楽しむ際に, 参与者らは COVID-19 を巡る状況を笑いの対象としており, 結果的には正常性バイアスに基づく認識を共有していたと言える。

6. 結論

本研究では女性友人同士らによる Zoom 上の多人数会話を対象とし, そこに表出する COVID-19 に関しての笑いのプロセスを観察した。分析により, 笑いを共有する相互行為を行う中で, 会話参与者らが COVID-19 の危険性を軽視する正常性バイアスを共有していること, 病気よりも周囲からの視線を懸念していることが明らかになった。参与者らが病気のリスク以上に, 社会から浮き出ること懸念しているのは同調圧力に従おうとする意識の表れであり, 本研究からこのような意識が20代女性らの仲間内での会話でも観察されることが確認された。これは世界的な感染拡大が続く現状において, 20代の女性らが持っている COVID-19 に対しての意識の一例であると言える。今後継続して調査を行うことで, このような個人レベルの意識と COVID-19 を巡る状況がどのように関連するのか, またそれがどのように日常的な相互行為に表出するのかを解明していきたい。

参考文献

- Bamberg, M. (2004). Form and functions of 'slut bashing' in male identity constructions in 15-year-olds. *Human Development*, 47, 331-353.
- 早川治子. (2000a). 相互行為としての「笑い」—自・他の領域に注目して— 文教大学文学部紀要, 14(1), 23-43.
- 早川治子. (2000b.) 「笑い」の分類に基づく数量的分析 文教大学文学部紀要 14(2), 1-24.
- Glenn, P. (2003). *Laughter in interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McLuckie, B. F. (1973). *The Warning System: A Social Science Perspective*. Washington, D. C. : U. S. Government Printing Office.

トランスクリプト記号

[オーバーラップ記号	¥¥	笑いながらの発話	=	続けて聞こえる発話
(.)	0.2秒以下の沈黙	(0)	ジェスチャー	,	音節の区切り
(0.0)	それ以上の沈黙	()	聞き取れない発話	?	質問
-	言い淀み	:	長音		

¹ 自然災害やパンデミックなどの危機的状況において観察される心的状態のこと。危機的状況において, 人々は目前に危険が迫ってくるまではその危険を認めない傾向にあり, このようなバイアスが心的ストレスを軽減する一方で, 災害時などのリスク回避を妨げていることが明らかにされている (McLuckie, 1973)。